





26 東予インダストリアルパーク

27 臨海道路桜並木

28 北条新田の元禄松

29 一ツ橋川

24 吉井地区
海岸の新田

25 飛行地と
フェリーターミナル

23 黒須賀記念碑

21 徳蔵寺

20 金毘羅道道標石

22 篠原栄吉

吉井公民館
18 内藤世南
19 日野松太郎(頌徳碑)

文
吉井小学校

1 旧東予市の中心地・周布

周布地区は、合併前旧東予市の行政の中心地であり、狭い区域内に多くの市の施設が計画的に配置されている。

昭和51年12月竣工の東予市役所（現東予総合支所）を皮切りに、昭和56年4月には中央公民館が開館、昭和58年3月市民体育館竣工、昭和63年12月には郷土館・図書館が開館、さらには平成11年4月には東予総合福祉センターが業務を開始した。これらは、おおよそ半径300m以内に立地しており、今は市の中心部ではなくなったが、公共施設の計画的配置という面では特筆されている区域。



旧東予市の中心地・周布

2 市道楠浜北条線のツツジ・ヤマモモ

東予総合支所の西側を南北に走る広い道路が市道楠浜北条線で、前の合併（壬生川町、三芳町）時の“公約道路”。その道路沿いは、ゴールデンウィーク前後は色鮮やかなツツジに染まる。また、6月には街路樹のヤマモモがたわな実をつけ、独特の味覚を求めて、ビニール袋片手に散策する市民の姿が見られる



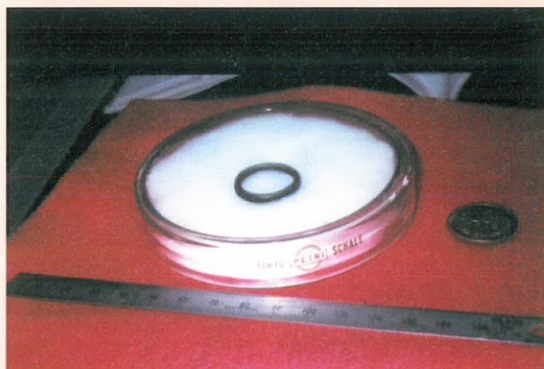
市道楠浜北条線のツツジ・ヤマモモ

3 久枝Ⅱ遺跡

周布のJAライスセンター東にある、弥生時代中期から古墳時代の遺跡で、遺構として竪穴式住居1棟と土坑や溝の跡が出土した。出土遺物としては、多量の弥生式土器や石斧、石包丁、石剣、石鏃、糸をつむぐ紡錘車、分銅型土製品などがある。

特に、「楽浪系石製指輪」は全国的にも珍しいもので、現在、愛媛県埋蔵文化財調査センターで常設展示されている。

この地方には弥生人の生活拠点としての大きいムラがあり、道前平野の古代文化の中心地であったと推定される。奈良時代には、周敷郡の郡役所である「郡家」などもあったといわれる。



楽浪系石製指輪

4 西条藩郷蔵跡

藩政時代、周布村は西条藩であった。村の年貢米を収納した郷蔵の跡が残っている。

収納日には、係が「竹ボラ」で村人に知らせ、年貢米を持ってくると、郷蔵の「計り屋」で、藩の手代と庄屋、組頭の村役人立会いの下、石数を計り、乾燥具合や青米・砕け米等の品質検査が厳しく行われ、それらに合格して初めて蔵入りとなったという。

5 三谷城跡

河野通久が阿波国富田荘（今の徳島市）に所領を有していたとき、伊予市三谷出身の三谷美作介政久一族が頼ってきたので、周布三谷の地を与え、弘安年間（1278年～1288年）に、この地に三谷城を築いたと伝えられる。

県の中世城館調査によれば、城の縄張りは長軸250m短軸200mの規模を有し、南は本郷川を利用し、周囲には塀や土塁を巡らし、土塁には矢狭間やばなまを設けるなど、堅固な城館であったという。土塁構築のために大量の土を取った地区を「土取部落」といい、今に築城の名残をとどめている。

三谷氏が滅んだ後も、越智氏、渡部氏と城主が変わりながら、城館は健在であった。享禄4年（1531年）、剣山城主黒川元春が渡部氏を滅ぼした後は、黒川氏8人衆の一人荒井藤四郎考宣の拠るところとなった。

6 13人首塚とお藤小藤の墓

三谷城主荒井藤四郎は村人には慕われていたようだが、一揆の企てありということで、文禄4年（1595年）、三津屋の一色右馬三郎重之率いる一色党に攻め滅ばされる。村人は討ち死にした荒井の家子郎党13人を哀れみ、首塚を作って祀ってきた。昭和63年の県道改良に際し、周布文化財保護委員会の手で、現在地に移し供養塔を建立した。

また、周布横田の田の中にある小さな2つのお塚は、難を逃れようとしてここまで逃げてきて討たれた、藤四郎の2人の姫君、お藤・小藤のものと伝えられる。

7 周布地区の獅子舞

周布地区には二つの獅子舞が伝承されている。

一つは「本郷獅子舞」、もう一つは「天神獅子舞」である。「本郷獅子舞」の歴史は古く、明治5年頃に獅子頭を購入した記録が残されている。若衆が“なぶり子”を肩車して伊勢音頭を唄いながら、本郷部落の一軒一軒を獅子を廻して練り歩くのがこの地区の秋祭りであった。その後一度廃れたが、昭和44年から郷土芸能として復活し、平成5年には「本郷獅子舞保存会」が設立された。

一方の「天神獅子舞」も完全に途絶えていた伝統を地区の有志の発案で、武田義郎先生（獅子頭の製作）や「本郷獅子舞」経験者の協力を得て、平成2年12月に見事復活させた。

8 寂光寺と阿弥陀三尊

富岡にある寂光寺は臨済宗妙心寺派に属し、本尊は阿弥陀如来、脇仏は観世音菩薩と勢至菩薩で、いわゆる阿弥陀三尊である。阿弥陀如来像は、快慶の流れを汲むとされる中央の仏師によるものとされ、鎌倉時代中期の名作である。

富岡は藩政時代は小松藩に属しており、富岡出身の僧海霊が小松藩主から土地を賜り、建立したものである。したがって、小松藩3代藩主直卿なおあきらの扁額へんがく「仏土山」「寂光寺」が寺宝として伝えられている。



13人首塚



本郷獅子舞



寂光寺阿弥陀三尊

9 密乗院と細川英道住職

密乗院は真言宗醍醐派の寺。寺伝によると、延応元年（1239年）醍醐寺第11世座主・憲深僧正が本尊不動明王を守護されてこの地に来たとき、楠の下で休息された後出発しようとしたが、本尊が動かないので、この土地こそが本尊を安置すべき霊地と悟り、この地に寺を建立したという。

時代は下り、戦中戦後の非常に困難な時期の住職は細川英道僧正で、周布村の村長や教育長なども努められ、村の発展に多大な貢献をされた。先生は讃岐の出身で、幼くして密乗院に入山され、真言宗の宗会議長や財務部長、宗務長等も歴任され、昭和41年には第98世総本山醍醐寺座主第49世大本山、三宝院門跡、第8世真言宗醍醐派管長に就任された名僧であった。

10 西条藩領境標柱

西条藩が他藩との境、19箇所に建てた石製の標柱で、現存するものは9柱といわれているが、周布地区にはそのうち2つが残っている。「従是北西条領」が平田クリニック付近、「従是南西条領」が市道楠浜北条線沿いの愛媛新聞東予支局北に、それぞれ建っていた。

現在は、藩政時代の歴史を語る貴重な石造文化財として、公民館前に大切に保存している。



西条藩領境標柱

11 周敷（しゅうしき）神社

延喜式神名帳に記載されている式内社の一つ（伊予国に24社、旧東予市に3社）。祭神は火明命、脇神は大山祇命と大己貴命。桁行3間、梁間2間の切妻、平入り流れ造り、屋根は以前は椀皮葺きであったが、今は銅板葺き。木組みや彫刻が安土・桃山時代の特色を良く伝えている、見事な神社建築である。破風飾りには蚕や桑の彫刻があり、古代周桑地区が養蚕の盛んな地であったことを伝えている。本殿は市指定文化財。

社室に、松山藩狩野派の絵師で馬の名手ともいわれた松本山雪が描いた「黒馬」「白馬」の絵馬、今治藩の絵師で医師でもあった山本雲溪が描いた「韓信の股くぐり」がある。



周敷神社の絵馬

12 吉田土手の桜並木

「花に酔う桜並木や吉田土手」中山川左岸土手のソメイヨシノの桜並木は、昭和35年頃、青年団や吉田地区の人々の手によって植えられた。以来、除草、害虫駆除等大切に育てられ、今では道前平野の花の名所になっている。

平成8年、（財）日本さくらの会から表彰された。



吉田土手の桜並木



ひょうたん池の桜

13 太政官道（だじょうかんどう）遺構

大宝律令ができる、都と各地の国府を結ぶ官道＝太政官道が整備された。

そのうち南海道（紀伊から淡路を経て四国へ通ずる古代の官道）の「^{うまや}駅家」（＝4里～5里ごとに置かれた宿泊、休憩所）の一つ「^{ふなき}周敷駅」が周布にあったことが知られている（場所は2説あり、特定できていない）。

石田のひょうたん池から富岡に通じる道筋に「大道の下」といわれるホノギが残る。桑村の三島神社付近には「大道の上」というホノギがあり、当時の国府が置かれていたとされる今治市富田へ向かって、幅員9mの直線道が通じていたといわれる。

また、周布には、長田地区の「大坪」、「一ヶ坪」や久枝地区の「大縄手」など、条里制の名残と思われるホノギも多く残っている。

14 ひょうたん池の桜

通称「ひょうたん池」のほとりに、88本のソメイヨシノがその艶やかさを競う。昭和30年頃に植樹され、桜保存会で管理している。期間限定、地域の婦人会によるおでん販売も好評。



ひょうたん池の期間限定のおでん屋

15 森田重吉

天保8年～明治24年。石田に抄紙工場を興し、製紙業が地域の産業にまで発展する礎を築いた。吉井は、国安とともに旧東予市の紙どころであったが、近年はこの地区で操業する業者は2、3になってしまった。

16 土田ノ木（どだのき）の大榎木（おおえのき）

県指定の天然記念物。周桑平野一の大木で、昔は桜三里の峠越えの旅人が目印にしたという。根回り14.15m、高さ25mで、東西方向に20m、南北方向16mもある。



土田ノ木の大榎木

17 トンカカはん

石田地区に伝わる盆踊りで、市指定の無形文化財。^{くらみつ} 闇岡神社の境内で、新暦8月19日に踊られる。天正の陣で討ち死にした郷里の勇士の霊を慰める弔い舞から始まったとされる。

石田地区では「トンカカはん保存会」が結成されて伝承に努めているが、吉井小学校でも地域の伝統芸能として全生徒に習わせている。

18 内藤世南（五郎）

明治4年～昭和21年。子規・鳴雪などの指導を受け、俳句をよくした。吉井小学校で教鞭をとった後、吉井村助役、村長を務めた。

19 日野松太郎

明治10年～昭和14年。玉之江の庄屋で、村会議員、産業組合長、吉井村村長、県会議員、帝国農会議員等を務めた郷土の偉人。吉井公民館前に頌徳碑が建っている。

20 金毘羅道の道標石

広江地区には、「左今治 右金毘羅」までが判る石柱が残っている。下方が地中に埋まっている。

21 徳蔵寺の涅槃像と両界曼荼羅、織部灯籠(キリシタン灯籠)

広江地区徳蔵寺にはいくつかの貴重な寺宝が収蔵されている。元禄6年(1693年)厚信家から寺に寄進された涅槃像と両界曼荼羅で、作者は法橋栄賢と伝えられ、絹本着色の見事な作品。愛媛県指定の有形文化財。同寺には一柳直卿書の山号扁額もある。また、寺の裏庭には珍しい形をした灯籠がひっそり建っている。“織部焼”で有名な古田織部が考案した様式であるため「織部灯籠」といわれ、南蛮風のデザインから「キリシタン灯籠」ともよばれている。頂部が欠損し、正面の像も風化して原型をとどめていないのは残念である。

22 篠原栄吉

明治22年～昭和50年。今在家海岸で海苔養殖を創め、漁業組合で指導的役割を果たす一方で、独学でカブトガニの生態を研究し、大きな成果を上げた。河原津をはじめとした旧東予市の海岸で、今取り組まれているカブトガニの保護活動の原点は、彼の活動成果にあるといっても過言ではない。

昭和27年には常陸宮殿下(当時、義宮)が篠原家をご訪問され、その研究成果をご見学になられた。また、昭和41年の昭和天皇の本県行幸の際には、国民休暇村でカブトガニその他についてご説明申し上げた。

県教育文化賞、愛媛新聞社賞受賞。

23 黒須賀記念碑

今在家にある。奈良時代、綾錦織にすぐれた、やんごとなき綾延姫が流されて、黒須賀の浜に漂着しているのを住民が田野まで送って行って鎮座したのが、綾延神社の始まりと伝えられている。このときの功により、住民は汐崎姓を賜ったという。

現在でも、綾延神社の秋祭りの御神幸には、今在家の汐崎(塩崎)家から代表が必ず出席している。



日野松太郎頌徳碑



金毘羅道の道標石



徳蔵寺の両界曼荼羅

24 海岸の新田

今から950年くらい前から250年くらい前までの間、吉井地区の今在家・広江の海岸を埋め立て、盛んに新田が開発された記録が残っている。今在家地区では、十九人新開・北新開・蔵井新田・高須新田・お救新田など、広江地区では、荒新開・野津子・江口新田・常夢請新田・壬新田・宝暦新田などの地名がある。

25 「飛行地」とフェリーターミナル

現在、ゴルフ場や工場群となっている今在家の海沿いの一帯は、通称「飛行地」と呼ばれることがある。その名のとおり、昭和13年から15年にかけて、逓信省航空機乗員養成所として埋め立て・造成が行われた土地で、その後海軍航空隊に衣替して、操縦要員を養成していた。ほとんど空襲は受けなかった旧東予地区の中で、ここだけはアメリカ軍の機銃掃射や空爆を受けた。ゴルフ場の片隅に、記念碑と平和観音が安置されている。

終戦後は塩田、農用地に転用された後、現在のゴルフ場や工場群になった。

その「飛行地」の海岸には、東予港フェリーターミナルがある。市政施行間もなかった昭和48年、大阪南港と四国を結ぶ大型フェリーが就航し、以来、旧東予市の発展に大きく貢献してきた。最近では、国内では最大級の新造フェリーが就航している。

26 東予インダストリアルパーク

日新製鋼、田窪工業所、住友共同電力のほか、中小事業所が立ち並ぶ西条市の工業拠点の一つ。特に、日新製鋼のメッキ工場は世界トップレベルの技術を持っている。また、住友共電の発電所は、近年では少なくなった石炭火力発電所。

27 臨海道路桜並木

東予インダストリアルパーク前の臨港道路の桜並木。地元では「千本桜」と呼ばれ、満開の時期になるとドライバーの目を楽しませてくれる。

28 北条新田の元禄松

多賀地区の農地の多くは、近世の干拓事業によってできたものである。三津屋の旭新開は松山藩、北条の塩浜新田、御助新田、北新田、又四郎新田は小松藩によって干拓された。

事業以前の海岸は、三津屋と北条の北半分が高縄山系の流砂で、北条の南半分が石鎚山系の流砂で堤防が築かれ、海岸を守るために多くの松が植えられていた。これらの松は干拓事業完成後にほとんど伐採されたが、干拓事業の指導者・佐伯又四郎にこの地（＝北条新田）の指導を託された越智家は、敷地内に残された大松を今も大切に守っている。屋号を納屋という。



飛行地の記念碑と平和観音



臨海道路桜並木



北条新田の元禄松

29 多賀地区の自然植物

多賀地区には、大曲川、崩口川、一ツ橋川の3本の川が流れている。どの川も川床から湧水が流れ出しており、その湧水の条件がなければ育たない、ミクリ、ナガエミクリなどが混生している（環境省絶滅危惧種）。また、ハンノキは崩口川の支流、郷呂川の河畔と大曲川の旧河畔に少し残っているにすぎない。昔は河畔林として繁っていたと思われる。真直ぐに伸びる木であるため、稲木などに使われていた。後世に残したい樹木である。

30 北条里城跡

北条には、鎌倉時代から室町中期まで多賀谷修理太夫の館があった。天正の頃まで飯塚氏の館（北条里城）と云われたが、秀吉の四国侵攻によって破却された。塩見氏、黒河氏の屋敷となり、江戸末期には西の庄屋の屋敷となった。明治になって多賀小学校の校地となる。近藤篤山と黒川石漁の母親・菅女の手植の松と云われる大木（根廻り4.3m）があったが、昭和62年10月、自然に倒れた。切り株は小学校、公民館、東予郷土館に残る。

31 長福寺と南明禅師、藤の花

長福寺は弘安の役（元寇）で活躍した河野通有が建立したと伝えられている。県の有形文化財の梵鐘、市の有形文化財・一柳直卿の額で有名である。

その中興開山の南明禅師は、小松の仏心寺の開山でもある。没後、東山天皇から禅師号を賜った。生前に彫られたという木像もあり、「喜左衛門狸」の名付け親とも言われている。本堂は荘厳で、当地方随一の禅寺である。

また、境内には4本240㎡の藤棚があり、ゴールデンウィークの頃に白、紫、赤紫の花が咲き誇る。三色の藤は珍しく、市内外から多くの見物客が訪れる。

32 “とうどうさん”の復活

豊作を祈る伝統行事として各地で続いてきた「とうどうさん」は、昭和30年代に一度途切れた後、今や、市内各地で伝統行事として復活しているが、その先鞭をつけたのが、昭和48年に全国にテレビ放映された、多賀地区で復活した「とうどうさん」であることを知る人は少ない。

33 きざえもん祭り

おおきみ大気味神社のホルトノキの大きな空洞に住んでいたとされる伝説の狸。四国三大狸の一つとして変幻自在の神通力があったといわれる。特に、いたち、イナゴ封じに霊験があり、陽気で踊り好きの狸であったと伝えられている。

まちづくりグループにより、5月第3日曜日の「きざえもん祭り」で、見事に“復活”した。南明禅師が名付け親とも言われる。



長福寺の藤



とうどうさん



きざえもん祭り



金性寺の薬師如来像

34 金性（きんしょう）寺

北条福王院にある仏法山金性寺、本尊は薬師如来。源頼義が伊予守であった頃（11世紀）、伊予の国の49カ所に大伽藍を建立し、京都の七仏薬師を移した。福王院はその一つで、当時は七堂伽藍の大寺であったといわれる。興国4年（1343年）細川頼春が侵攻した際兵火にあい、その後再興されたが、秀吉の四国侵攻で壊滅した。

現在の建物は昭和48年の火災の後、再建されたものである。本尊の薬師如来像は県の有形文化財、境内の黒松は市の天然記念物に、それぞれ指定されている。

周辺には、金性寺に関係するとみられる、「光善坊」「大善坊」「塔の裾」「堂の後」「堂の前」等の小字が残っており、往時の繁栄ぶりを窺うことができる。

35 本松（ほんしょう）寺跡と飯尾館跡

本松寺の開基は、天文17年（1548年）飯尾維敏いびのりによるといわれるが、現在は三界萬靈さんかいばんれいの石柱があるのみ。その子孫と云われている二名氏は、本松寺さんと呼ばれていた。

石柱から200m東に飯尾館跡があり、その森の中に楠の大木と祠がある。

また、飯尾館跡から50m南に飯尾塚がある。千足山中ノ森城主・能瀬越前守は黒川元春に討たれ（1528年～31年頃）、この地に葬られた。石碑があり、楠の大木がある。

36 壬生川駅前のイルミネーション

旧西条市には目を見張る素晴らしいイルミネーションが全国的に有名になったが、旧東予市にもささやかながら2つのイルミネーションが人々を楽しませてくれる。美容室UBと壬生川駅前（地元町内会の手で）。

37 秋祭りだんじり統一運行

多賀地区秋祭りの10月12日の夜、駅前通りに多賀・壬生川地区のだんじりなど10台が集まり、華麗な「かきくらべ」が開催される。多くの観衆を集める多賀地区の秋祭りの“華”である。統一運行の運営は、各だんじり会が順に当番で当たっている。

38 南弘庵

三津屋の南弘庵は、明治35年、地区住民の浄財によって再建された、間口2間、奥行2.5間こうてんじょうの大師堂である。

その内陣の天井は格天井で、それぞれに漢詩、佳句、絵、和歌、俳句、俳画などが描かれている。これらの執筆者はいずれも地区内や近郷の人達と思われる。維新前の寺子屋教育しか受けていない一般庶民が、このような立派な作品を為し得るということは、この地区の文化水準の高さを示すものであり、貴重な文化遺産である。



壬生川駅前のイルミネーション



南弘庵

39 三津屋橋・お好み焼き「ふる里」

田中麗奈主演、磯村一路監督、敷村良子原作、映画「がんばっていきまっしょい」（第4回坊ちゃん文学賞受賞作でもある）のロケ地が、三津屋地区に2箇所ある。

ホームページ上で紹介されるなど、ファンの間では隠れた人気スポットになっている。映画に登場したレトロな石橋と温かみのあるお好み焼き屋さんとともに健在。



三津屋橋

40 三津屋本通り

旧東予市が合併した頃（昭和40年代後半）のメインストリート。商業の中心地が駅前本通りへ、さらに市役所前の通りへと移り変わっていく中で、昔日の賑わいはなくなったが、古き良きレトロなたたずまいを色濃く残した“昭和の商店街”。

後継者を中心に商店街の活性化に取り組んでおり、駅前通りで始まり運動公園へと会場を移した“夏彩祭”も、隣接する新地通りでの開催となり、往時の賑わいを取り戻すべく奮闘中。

41 新地通り

古くから商店街として賑わっていた新地通りは、近年道路が拡張された。そこには地元彫刻家・田中高氏の作品が置かれ、生まれ変わった新地商店街の姿がある。氏の作品が“ちょっといい”。



三津屋本通り

42 一色耕平の頌徳碑

明治25・26年頃から40余年にわたって、銅山の精錬所から排出される硫煙で、東予地域の農林業に大きな被害が出た。この四阪島煙害問題解決にあたって、農民代表の中核として協定成立に尽力したのが、壬生川町長一色耕平氏である。

その功績を讃えた碑が、昭和28年、旧壬生川奨農会館（周桑病院前）に建てられた。刻字は内閣総理大臣吉田茂の書である。壬生川公民館（元の役場）にも頌徳碑があり、生家のあった明理川には邸跡の碑が建っている。

43 越智邸

越智家は堀川港近くにあり、屋号を「桝屋」といい代々肥料商を営み、町一番の大地主でもあった。広大な屋敷には母屋、隠居所をはじめ、土蔵や倉庫、使用人の住居、物置など数棟の建物が建っていた。

国道の拡張工事で土蔵などが取り壊され、現在は母屋、隠居所、茶室が残っている。座敷天井の笹目の杉材（樹齢500年）、浴室のステンドグラス、大理石の浴槽、脱衣室天井の煤竹すすたけなど、数え切れない技術と細工が見られる。国の登録有形文化財。



越智邸

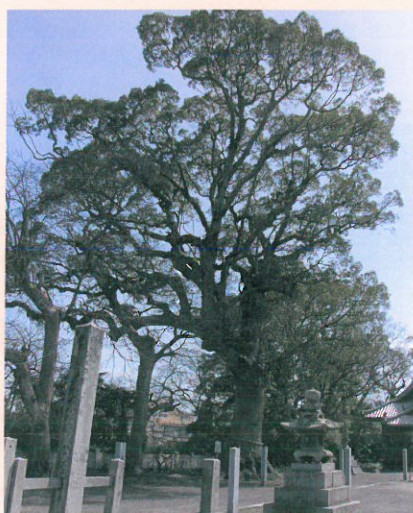


鷺森神社

44 鷺森（さぎのもり）神社と大楠

波静かな瀬戸の入り江、壬生川港堀川沿いにひととき濃く見える緑の森が「鷺の森」である。伝によれば、文和元年（1352年）、伊予国守護職河野通盛がこの地を埋め立てて伊勢神宮を勧請、その時植えた楠に白鷺が群棲したので、いつしか鷺の森と呼ぶようになったという。鷺の森神社の祭神は、天照大神、豊島大神など、主な建造物は、本殿、拝殿、三穂神社社殿。

「おかげん」の名で親しまれてきた壬生川鷺の森神社の管弦祭は、安芸巖島神社の神事に倣い、旧暦の6月17日に行われている。ご神木の楠は、高さ約25m、周囲約7mの巨木で、樹齢650年余は、大山祇神社に次ぐものといわれ、表面には青苔をつけている。昭和58年7月18日に東予市指定天然記念物。



鷺森神社の大楠

45 鷺森城跡

水壕で囲む「浮城」・鷺森城は、応永元年（1394年）伊予国守護職河野氏の一族である桑原撰津守通興が築城した。壬生川の入江沼地を利用し、東と南に堀をめぐらし、北は入り江を切り開いて海水を導き、航路を兼ねた堀川を造る。大手口は西側に置き、壕に橋を架け（一ツ橋）、後方に大手門を造った。現在は城跡の1/3が神社境内で、2/3が住宅地になっている。南西の国道沿いに「森岡さん」と呼ばれる小祠があり、城主の墓所であったと伝えられている。

「鷺森城跡記念碑」「鷺森城跡校歌の碑」「松山藩年貢米倉庫跡碑」「壬生川村公会堂跡碑」などがある。

46 繁栄橋

松山藩主松平定行公が、藩の東の玄関である壬生川港堀川の築港と大新田の干拓を約20年の歳月をかけて竣工させたのは、明暦2年（1656年）。この地に多くの繁栄がもたらされることを願い、堀川に注ぐ中川の河口に橋を架け、堀川奥の門繁栄橋と名付けた。

明治40年の道路改修により、木造橋が石橋に造り変えられた。欄干には橋の建設に尽力のあった人の名前が記されている。橋の袂には常夜灯があり、台石には大阪商人と壬生川商人の名前が刻まれている。

現在は鷺森神社境内に移設されている。



一色東洋塾跡

47 一色東洋塾跡

藩政時代、初級のよみかき、そろばんは寺子屋で学んでいた。これを修了した青年たちが学ぶ上級の学問所は庄屋の一色東洋先生（範序＝安政年間）の私塾で、四書五経の講義が中心であった。

明治100年記念事業として、昭和43年に「一色東洋先生私塾の跡」の記念碑が建てられた。

48 河野井戸

この地には、鎌倉時代、豪族井門五郎氏（河野家の一族）の館があった。その屋敷には名泉があり、人々はこれを「河野井戸」と呼び愛用したという。その後、鷲森城主となった桑原氏は後に姓を壬生川氏と改め、この地に出城を築き「仕出しの館」と呼んだ。

49 網敷天満神社と宇賀神社

菅原道真は延喜元年（901年）大宰府に流される途中、壬生川の天神ノ木に上陸した。新川の畔にあった小社から、寛文3年（1663年）神官矢野義重らによって、この地に移築造営された。地元の人には「天神さん」と親しまれ、5月3日には春祭りが行われている。昔は書初大会の優秀作が展示されたりしていた。

宇賀神社は元は蛭子町に「宇賀之宮」として小社があったが、手狭になったので大正11年に天満神社境内に新築遷宮した。「宇賀さん」の名で親しまれ、事業成功や失せ物、病気、悩み事等の解決を叶えてくれる霊験あらたかな神様ということで、近郷近在はもちろん、遠く中四国、京阪神、首都圏にも多くの崇敬者がいる。

50 丹生小学校発祥の地

壬生川小学校のはじまりは明治8年8月30日に開校した壬生川村立丹生小学校で、場所は興照寺であった。山門を入った右側に石碑が残されている。

51 富士紡と桜並木

昭和11年4月、富士紡績株式会社が誘致され操業を開始した。このことは近代周桑一円に計り知れない経済効果をもたらした。近代的な工場として、寄宿舎、病院、レクリエーション施設を備えていたが、今はその面影はない。正門横には、時の大蔵大臣勝田主計の筆による記念碑があり、裏面には、当時の社長堀文平や壬生川町長十亀又八など、功績のあった人たちの氏名が刻まれている。

工場西の道路と大新田干拓地の^{しおどめ}汐留の間の土手約700mには、昭和50年頃地元老人会によって桜が植えられ、春には多くの花見客が訪れる。

52 菅原道真公上陸の地

新川堤に出たところを茨の木大堰から北側の土手道を東にとり、^{つうあん}通庵橋の手前から北へ曲がる田道を100mあまり歩くと、菅公ゆかりの地・天神の木に着く。この地が菅原道真公上陸の地と伝えられており、昭和33年に壬生川史談会が建てた「菅原道真公上陸之地」の碑がある。



河野井戸



宇賀神社



菅原道真公上陸の地

53 東隅宮（とうぐう）

高橋右京之進の館跡を地元の人たちが祀っている。例祭日は、10月14日に藤森神社と合同で行う。

元龜2年（1571年）に、妙口劍山城主黒川美濃守と新居郡金子城主金子備後守の連合軍が鷺森城主壬生川撰津守を襲う。劣勢となった壬生川勢は芸州広島の高橋右京之進に援軍を求め、この支援により勝利する。右京之進はこの戦功により喜多台の地を与えられ、地頭職としてこの地の開発に努めた。



藤森神社の藤

54 藤森神社の藤

右京之進は村の鎮守の神として、藤森荒魂神社^{あらみたま かんじょう}を勧進した。そこに樹齢約300年といわれる藤の木がある。1.5mを超える花房をつけ、ゴールデンウィークには市内外から多くの藤見客が訪れる。地元の老人クラブが手塩にかけて世話をし、この藤の花をもっとアピールしようと、オリジナル曲「藤森の歌」を制作した。（作詞：佐伯秀雄さん、作曲：佐伯格さん）開花期間中には歌謡祭も開催され、地域住民の交流の場ともなっている。



新川土手

55 新川土手

新川は壬生川地区を流れている小さな2級河川。その川の両側の土手道には、菜の花が咲き、桜並木もあり、地域の人々格好の散歩道となっている。土手上から見える田園風景や石鎚山・世田山の眺望は素晴らしく、歩く人の目を楽しませてくれる。

56 大曲砦（おおまがりとりで）跡と壬生川撰津守の墓

天正2年（1574年）、鷺森城主壬生川撰津守通光は劍山城主（妙口）黒川対馬守通俊と戦う。壬生川勢は城を出て大曲砦（郷土館の西、中城団地^{ちゅうじょう}付近の楠の所と伝えられる）に陣をしいたが、黒川勢は強く、次第に劣勢に立たされた。不利とみた撰津守は砦を出て、大曲橋を渡り円海寺に入ろうとしたとき、黒川方の久米道清、首藤金世の両名に討たれ、近くの円海寺の築山^{つきやま}に葬られた。

地元の人からは「築山さん」と親しまれ、参拝に訪れる人の香煙が絶えることはない。願い事が叶う御利益があるという。



壬生川撰津守の墓

57 柳森（やなぎのもり）神社

通称「柳のお天皇さん」。旧暦の1月7・8日が例祭日になっている。「東のお椿さん」ともいわれ、疫病のがれ、開運の守護神として、周桑地区一帯はもちろん、西条の山間部加茂地区からも多くの参詣者がある。



久枝Ⅱ遺跡



天神獅子舞



トンカカはん



徳蔵寺織部灯籠



フェリーターミナル



新地通り（夏彩祭）



東予インダストリアルパーク